

# 俳句日記

2013-2015

ホームに戻る

つれづれにメダカの日々を眺めをり



三匹のメダカと過ごす年の暮



メダカ死す一つ覚えのお経読む



2013年

ホームに戻る

一月

九十二の義母とひ孫の初笑い

大鵬の飛び去り（空冬の峰 大鵬逝去

二月

凍りつくロシアの大地に星落つる 隕石落下

三月

春を待ち無著世親に会ひに行く 北円堂

春うらら庭を横切るイタチの子

仲春の朝日が通る庄屋道 奈良県味間



梅日和母の形見の埴輪かな

四月

ムスカリは春の野に立つ仏かな

定年の窓に流れ桜かな

興福寺南円堂特別公開

春風や不空羅索観音像春

春うらら鹿に道聞く南円堂

忘れ物いくつもあり〜昭和の日

五月



径途絶え古き祠と藤の花

母の日に妻へ衷心贈物

六月

顔を見ぬ一分診察夏の風邪

風薫る土堀の続く西の京

夕闇を染めて芍薬散りにけり

缶蹴りの缶一つあり路地の梅雨

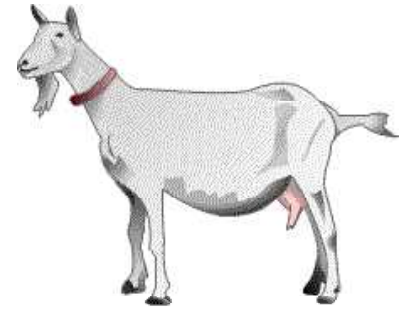
いつの間に田植終わ〜散歩道

七月

夏の夜や喋る人なき妻の留守

窓を這ふ蟻一匹の命かな

無防備に眠り(妻の昼寝かな



山羊が食む草の匂ひや半夏生

素麺に茗荷浮かべて昼餉かな

晴天の青田に映る雲居かな

こき父の流し素麺竹の樋

蝉の声去年の命引継ぎて

八月

田の神の気配感じる青田かな

諸声に心経唱へり蝉の声



字あまりをそつと飲み干す麦酒かな

何もなく過ぎて吉日麦酒飲む

九月

蝉の声一斉に止む奈良の里

面塚に世阿弥舞ひ降る初秋かな 奈良県結崎

パソコンのファンの音止む九月かな

一〇月

<sup>いにしへ</sup>古の飛天降臨秋の風 薬師寺東塔「水煙降臨

展」



野仏に供つてありし菊の花

一一月

歩いても会ふ人もなき冬の島 丸亀広島

時雨るや母子三代連れだちて

路地の秋微かに聞こゆアーリラン 実家での少年

期の思い出

一二月

冬明かり千の仏の光かな 三十三間堂

居眠りにそつと肩貸す炬燵かな

冬の蚊の現れ消え(部屋灯

夜回りの拍子木過ぐる枕元

本津宇治と賀茂川渡り冬の京

父と子の桜楓図照らす冬灯火 智積院長谷川等

伯・久蔵の父子の障壁画

2014年 ホームに戻る

一月

枯れ葉踏む二月三月四月堂 東大寺

九匹の目高と交す年始かな

三色井風邪ひきの妻に作りけり

二月

冬日落つ後ろ姿の昭和かな

家族葬よそ者となる二月尽

奈良西大寺

雪女愛の秘仏を拝みをり 西大寺・愛染堂

冬御堂静かに拝む寺ガール

雪帽子母の名残の埴輪かな



三月

螢烏賊の小さな命頂けり

いかなごに母の涕噛みぬる

四月

何もかも肩唾で聞く四月馬鹿

ランドセル小さき肩に春の夢

早春の菩薩を拝む中宮寺

春の野に浮かぶ影絵や飛蚊症

一枚のICカード春の旅



暖かやペットショップの猫眠る

ブランコの空駆け上がる少女かな

春灯に人生行き交ふ外来棟  
蒲公英の一つこつと荒田かな  
淋しいと母の電話を聞きし春  
ムスカリの香は優しき春の風  
鳥帰る水面に夢のかけら置き  
菜の花に見え隠れする農夫かな

昭和の日

追ひかける父母の俳昭和の日  
iPadに白髪一本昭和の日  
飛んで行く時の流れや昭和の日  
思ひ出の小さき箱や昭和の日

芥子の花昭和の歌を口ずさむ 藤圭子さんを偲ぶ

五月

カマスの身白く弾けて夏来る夏  
じいちやんをやつてればいいこどもの日  
アパートの窓にはためく鯉幟

六月

梅干の漬け方語る母娘かな



父の日や父の器量を越えられず

七月

短夜やテレビの人も歳を取り



つれづれにメダカの日々を眺めをり

パソコンの唸り始める薄暑かな

喧嘩して荷物まとめた夏休夏

ふくよかな吐息を残す生ビール

何よりも検査の後の生ビール

もうあかりリモコン握る熱帯夜

夏の宵子取りが来るぞと母の声

揚羽蝶<sup>そら</sup>宙の果てから舞ひ降りる

ステテコと腹巻き姿父の夏

蚊を潰す微かな痛み生じをり

誕生日妻と乾杯大暑の夜

縁台に並ぶ団扇の昭和かな

八月

まほろばの里の土踏む盆参り

昭和も戦も遠き終戦日

中がよし孫の成績夏休み

白鷺や青田の海に佇みて

夏休み孫の小さき箸洗う

九月

目を閉じてツクツク法師の話聞く

新涼やふと追ひ焚きのボタン押す

朝顔と早起き競ふ老い樂し

秋の雲映し流るる飛鳥川

梅の本に朝顔一輪軒を借り

鶴鴿の道案内の散歩かな

諍ひ（人も恋しき秋の夜

大いなる時代去りけり九月尽（伯父九十八歳で逝

去）

早世も長寿も一期秋の空

義父惚びふた昔前の古酒を呑む

颱風に備へ板打つ父の肩

一口月

同窓誌三人の友逝く晩秋

水影の深く沈みし秋の空

京都養源院

宗達の象と向き合ふ秋の寺

秋深し象に向き合ふ養源院

象の目に鎮魂宿る秋の寺

一一月

毎朝に再起動する老いの冬

減らず口叩く女房と冬に入る

天平の美女と向き合ふ冬はじめ 正倉院展

京の冬鳥獣戯画の飛び跳ねる

躍り出る正了知大将冬の奈良 興福寺東金堂

後堂

名も知らぬ鳥の来て去る冬の庭

一二月

伊勢参

冬の旅いにしへひと人と伊勢参

伊勢の海冬満月を映しをり

川渡りまた川渡り伊勢の冬

総選挙で自民党圧勝

軍靴の音聞こえ始める師走かな  
比例尺は老人党と書く師走かな

解けぬゆゑ脳トしとかり冬うらら日

ゲームする孫に見せた青写真

月遊ぶ冬の公園通り過ぐ

三匹のメダカと過ごす年の暮



袖風呂に手足を伸ばす天下かな

2015年 ホームに戻る

一月

冬燈火稗田阿礼の声を聞く

冬の夜青き爪痕劇画読む 完全復刻版影・街

田に一つ佇む鳥の影凍る

二月

介護され子供に帰る布団かな

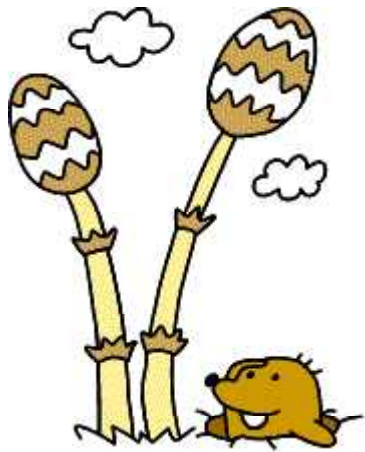
孫からのメール届くや春の風　ごち(入学祝い)で

孫からのメール

水仙の光静かに辻地蔵

三月

物言はぬ武蔵の姿春寒し　戦艦武蔵発見



散歩道土筆一本持ち帰へり

四月

春一番野飼の山羊の煙めきこて

春の駅馴染まぬ背広溢れをり

選びても買はず立去る種袋

春雨やデイサービスに送り出す

緑り言も一音と成る春の雨

声高し桜の下の園児かな

五月

目高死ぬ小さき春に音もななく

こどもの日

こどもの日 デイサービスは今日もあり

こどもの日 チャンバラごつこの消え(路地

六月



外出は通院ばかり梅雨の入り

七月



寡黙なる父と鮎釣る川の音

梅雨明けに人參の種時く病後かな

メダカ死す一つ覚えのお経読む

同じ日に生まれし義母<sup>は</sup>と大暑<sup>は</sup>かな

八月

蝉の声夏夏夏と聞こえたり

窓硝子誰かがノックする夏の闇

ちちはは  
父母の命をつなぐ盃蘭盆会

九月



コスモスに今年も逢え嬉しきよ

稲の秋黄金の海に風渡る

雨粒の稲穂に咲き瑠璃の花

帰つれなく我が家なれど曼珠沙華

一〇月



静かなる月の海見る薄かな

恥づかしく思ひ出ばかり酔芙蓉

稲穂波朝日に浮かぶ浄土かな

月の海薄の影の浮かびをり

右里の地藏に供へる女郎花ヨミナヘシ

一一月

霧の海朝日に山羊の影浮かぶ

足の指痛みて摩り冬に入る

七五三自分がいないと泣く子かな 兄の七五三の写

真を見て

一二月

冬日射すシンピジュールの蕾かな

寒月の見下ろす家の夕餉かな

三人の家族の夕餉一人鍋

とくとくと血の流れ聞く夜長かな

短日や何事もなく一日消ゆひとひ

眼鏡拭きを葉に眠る冬の夜

動かねば老老介護冬の月

備忘録忘れて探す師走かな



寒空に蝶舞ふほどの日射しかな



俳句日記 2013-2015 あとがきにかへて

戻る

低ナトリウム血症で入院 2015年06月16日

薬の相互作用で天理よろず相談病院に救急車で運ばれました。入院中、わけの分からぬ句が次々と出てきました。季語も定型も考えられず、ただ真情を吐露しました。

塩足らず倒れる夏至の救急車

生き死にの境を見たり点滴が

救急のベッドのそばに妻がいる

ありがたい君は観音菩薩かな

生きている不思議な世界目覚かな

誰か来て誰か去りベッドに縛られている

知らぬ間に病院のシステムに組み込まれ

意識とは先祖の夢か夏至の夜

二十万人に一人ぐらいその一人